

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 27 回 医学的、経済的に勝負の年を迎えよう

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

日本で古来使われてきた陰曆（旧曆）では 12 月のことを「師走」と呼びます。現在一般的に使われている陽曆（新曆）12 月の和名（日本語による名称）でもあり、その意味は、「師が走る」と書くことから、「新年を迎えるため、僧侶（師）があちこちで読経を頼まれ、走り回っている」とか、最近では「学校の先生(教師)が忙しい」などとも解釈し、年末の様子を表現しているといわれていますが、本当のことはよくわかりません。ビジネスメディア『Beyond』の解説によると、師走には「晩冬」「春待月」「苦寒」「三冬月」「歳極月」などの別名もあるようです。いずれも、冬の寒さと年末のあわただしさを表しているのでしょうか。とにかく、12 月は年末に向けて、せわしない雰囲気だんだんと広がっていきます。

そんな日本の師走の街並みの様子が、今年は昨年までとはちょっと様変わりしているのではないのでしょうか。

東京の地下鉄の車内には、この 3 年間ほとんどいなかった外国人がたくさん乗っていて、英語やフランス語など、外国語の会話があちこちから聞こえてきます。12 月 9 日の金曜日の昼下がりに覗いてみた、横浜・中華街のレストランや土産物店には、修学旅行の中学生や高校生の長い列ができていました。令和 2 (2020) 年の新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）突入以来、初めてのことです。

テレビの報道によれば、北海道ニセコ町のスキー場近くのホテルには、オーストラリア人やドイツ人など、昨年の 9 倍もの海外スキーヤーがこの地方独特の、粉のように乾いて軽い雪「パウダースノー」を求めて詰めかけているそうです。ニセコ町の隣町、倶知安町の観光関係者はテレビ記者のインタビューに「コロナ前にはまだ及ばないものの、通常に近い数の予約が入っている。観光収入が復活してよかった。コロナ感染がこれ以上増えて行動制限が再度行われなければいいのだが」と答え、コロナ感染症による観光収入の落ち込みに歯止めがかかり、以前の水準に向かって回復し始めていることへの安堵の表情を見せていました。

わが国にコロナ禍が降りかかってきてから、間もなく 3 年の月日が経ちます。感染者数はすでに 7 回のピークを越え、さらに第 8 派が襲来したと言われています。9 日付『産経新聞』によれば、8 日には全国で 13 万 2984 人の新規感染者が確認され、前の週より 1 万 5000 人増えたそうです。そのような日が連日続いています。

しかし、行動制限が解除され、海外から日本を訪れる条件が緩和、イベントの人数制限や国内旅行自粛も緩和されたおかげで、観光地や飲食店も賑わいを取り戻しつつあるのでしょうか。

たとえ第8派が大きな波となったとしても、この流れは変わらないと思われます。

なぜ、変わらないのでしょうか。現在流行しているオミクロン株という変異株による感染は症状が軽く、致死率も低いという情報もあります。医学的にはそうでしょうが、社会的に見れば、3年間の経験で、新型コロナ感染症に対する対応方法が一般の人たちにわかってきたということが大きいのではないのでしょうか。

ワクチンは、2回目までは対象となる国民の約9割が接種しましたが、3回目、4回目、5回目は接種率が下がっています。それでも社会活動が動き始めたのは、国民の生活が、すでにウィズコロナに移行しているということができると思います。

英国で行われたエリザベス女王の国葬では、天皇皇后両陛下を含む各国からの参列者はマスクをしていませんでした。サッカーのワールドカップカタール大会の観客席にも、マスク姿の人はほとんどいません。こうした状況を踏まえ、日本政府は「屋外や会話のないところでは必ずしもマスクをする必要はない」（岸田文雄首相）との方針を打ち出しています。しかし、実際に国内の街を歩くと、日本人の9割はまだマスクをしていますし、外国人観光客もその状況に順応しているように見えます。

法律や政府の指導などを超えて、自主的にマスクをつけた生活を続けているのですが、このことが大幅な感染拡大や重症患者の大量発生を抑え、日常生活を取り戻す原動力になっていけばいいでしょう。

飲食店も徐々に従来の賑わいを取り戻し、様々なスポーツ観戦や催し物も人数制限がなくなってきましたが、マスクをしたうえで大きな声を出す応援はしないのが当然のようになっていきます。外国の皆さんから見れば、「日本人はよく我慢しているな」と映るかもしれませんが、それが私たち日本人にとっては何の不思議もない、当たり前の生活になりつつあります。

しかし、12月と言えば忘年会の季節です。数人で居酒屋に集まる飲み会は復活していますが、何十人、何百人で集まる立食形式のパーティはまだほとんど行われていません。その結果、様々な団体の会合は3年間思うように開けず、街の飲食店もコロナ前の客足が十分には戻らず、2次会、3次会のお客さんも来ていません。私が常連客として通っていた都内のスナックは今年、開店35年を迎えましたが、10月末、ひっそりとその看板を下ろしました。マスターに聞いたところ、「コロナで減った客足は完全には戻ってこない。我慢の限界だ」と言っていました。

スキーや観光など、屋外での人の流れは戻ってきていますが、飲食店やパーティ会場など、人が集まる屋内の商売は実はまだまだコロナ禍に支配されているのではないのでしょうか。それで

も、マスクなどの対策で感染や重症化などのリスクを回避する方法を徐々に身に付け、そろそろと動き出している国民の知恵は評価すべきでしょう。

このコラムでも何度か書きましたが、人間の基本はコミュニケーションです。人との直接の交流、会話によって各人の世界が広がり、知識も増えていきます。商売も軌道に乗るでしょう。19

世紀の思想家で、学問の「けいおうぎじゆく慶應義塾」、報道の「じ じしんぱう時事新報」、社交の「こうじゆんしゃ交詢社」を創った福澤諭吉は「人間交際」の大切さを訴え続けました。そして、その「人間」を「にんげん」ではなく「じんかん」と読ませました。「人と人との間のリアルな接触こそ、文化文明の基礎である」と唱えたのです。

この3年間、飲食店がつぶれただけでなく、うつびょう鬱病になった人や、失業した人の数は大変な数であったはずで。退職の理由は「会社に就職しても、リモートワークが多く、上司、同僚と直接会うことがなく、きぞく帰属意識を持ちにくい」というのが多いようです。大学でも、今の3年生は入学の時から多くの時間を1人で過ごしてきました。大学は4年間あるのでまだいいのですが、中学校は3年間、専門学校などに至っては2年間の所もあり、在学中、全く人に会わないケースもあったものと思います。留学生の皆さんもそういう人が多いでしょう。

こうした状況は、人間形成を大きく狂わせてしまっています。今年はせっかく行動制限がない年末年始を迎えるわけですから、新しい年、令和5（2023）年こそはコロナ禍を乗り越え、普通の生活に戻る、そしてウィズコロナ、ポストコロナの新しい生活様式を作って人間交際を深めていかなければいけないでしょう。

コロナを完全に抑え込むことに挑戦している中国では、都市機能の停止、外出禁止などで市民生活が完全に止まり、経済が停滞し始めています。その中でワールドカップをテレビなどで見た一般人民は、他国の人たちがマスクをせず、大声で選手を応援しているのを見て、中国共産党のゼロコロナ政策に疑問と不満を爆発させました。その結果、習近平政権はコロナ政策の見直しを余儀なくされました。コロナ前、日本に大量に押し寄せていた中国人観光客が令和5年は復活するかも知れません。

コロナ前の日本に来た外国人観光客は、冬のインフルエンザ流行期や春のかふんしょう花粉症の時期に多くの人がマスクをしているのを見て「日本では悪い疫病が流行っているのか」と疑問に思ったそうです。今の日本は他国に比べてマスクをしている人が多いですが、マスクをしているからこそ、簡単には感染が広がらず、元の生活に戻るチャンスでもあるはずで。世界のウィズコロナ、ポストコロナに向けた大きな流れに乗り遅れないようにしなければなりません。マスクのあるなし

ではなく、どうやってコロナの中で普通の生活をするかを考える時代に入って行くわけです。その中で罹患率りかんりつが下がって行けば、それに越したことはありません。

12月10日に閉会した臨時国会は世界平和統一家庭連合（旧統一教会）対策や各閣僚ぎわくの疑惑ついきゅう追及で終始しましたが、緊迫する極東の軍事情勢に対応する防衛力の抜本的強化と共に、コロナ後の社会の構築を忘れてはなりません。新しい年は医学的にも経済的にも勝負の年になるでしょう。